

日韓トンネル通信

編集/発行

特定非営利活動法人
日韓トンネル研究会

本部事務局：東京都港区麻布台1-1-20
〒106-0041 麻布台ユニハウス513
TEL 03-3589-4188 FAX 03-5570-1634
E-mail office@jk-tunnel.or.jp

九州支部：0120-09-2188

(報告)ソウルで開かれた「日韓海底トンネルセミナー」に参加しました。

去る2月21日(水)、韓国ソウルの国会議員会館大会議室で開かれた「日韓海底トンネル研究開発セミナー」に野澤太三会長の代理で大塚茂副会長が討論者として参加した。このセミナーは、日韓トンネルの技術的動向などを討論し、日韓トンネルをより現実的な方向に近づけることを目的としている。主催はヤン・ヒョンギル(梁亨一)国会議員で、韓国の社団法人、韓日海底トンネル研究院のパク・キョンブ(朴慶夫)理事長がセミナーを推進してきた。

午前10時、主催者のヤン・ヒョンギル氏とパク・キョンブ氏の挨拶の後、発表者3名が日韓トンネルの建設効果や歴史的意義、北東アジアで果たす役割などについて講演した。

まず、ホ・ジェワン(許在完)韓国中央大学都市地域計画学科教授は、日韓トンネルとユーロトンネルを比較研究した成果を示し、ユーロトンネルで大陸側のフランスの受益が島国側のイギリスを大きく上回っているように、日韓トンネルでも大陸側の韓国の受益が日本側より大きいと考えられることを指摘した。また産業連関分析による日韓トンネル建設の産業波及効果や、成長潜在力モデルの分析結果を示し、日韓トンネルの建設が韓国経済の均衡発展を推進することを示した。

次にファン・ハクチュ(黄鶴周)延世大学土木工学科名誉教授は、今後、日本も韓国も単独で世界をリードするのは難しく、両国が手を取りあつて協力して今後の世界を牽引してゆくことの大切さを指摘した。また日本も

韓国も国民の多くが建設業に関連した分野に従事しているので、「玄界灘トンネル工事の着手」が両国の景気活性化のきっかけとなると語った。

シン・ジャン Chol(申章澈)崇実大学社会科学部教授は、ユーロトンネルの分析結果などから、北東アジア経済共同体の形成には北朝鮮の早急な開放と日韓間の陸上交通の確保



ヤン・ヒョンギル国会議員

(社)韓日海底トンネル研究院
パク・キョンブ理事長

セミナー会場となった国会議員会館大会議室に集まった聴衆



セミナーで日韓トンネルについて討論する主題発表者と討論者（ソウル）

が前提となると述べた。そして日韓トンネル建設は日韓両国にとってチャンスでもありリスクでもあるので、両国間の対立と葛藤の相互不信を果敢に清算し、日韓トンネル建設についてより積極的に議論することが大切と結んだ。

これらの発表に対し、討論者としてキム・チニョン（仁川広域市総合建設部長）、カク・チェウォン（中央日報経済研究所長）、大塚茂（当会副会長）がコメントした。

【大塚氏のコメントの要旨】

韓国サイドの主催でこのような大規模なセミナーが開かれた意義は非常に大きいと思う。日本の新幹線が大成功を治めた



大塚茂 当会副会

例のように、人間は両足で地上を歩いているのだから、地上につながった交通網、物流網、輸送網は絶対必要で大切なものと考えている。

日韓トンネルは、単に韓国と日本を結ぶトンネルではなく、アジアからヨーロッパに至るシルクロードの建設が最終目標であることを本日参加された先生方と共有でき、非常に感慨を深くした。当会のこれまでの研究により、日韓トンネルは技術的には建設可能という確信をもっているが、資金面でも日本、韓国、中国、ロシア、関係国の指導者がこのプロジェクトのコンセンサスを作り、国家的な資金調達を行えば、この大事業は資金的にも経済的にも成功すると考えている。

(報 告)釜山で開かれたシンポジウム「日韓海底トンネルと釜山の選択」に参加しました。

去る、5月14日(月)、釜山市の釜山広域市上水道事業本部の大会議室で開かれた国際シンポジウム「日韓海底トンネルと釜山の選択」に野澤太三会長が主題発表者として、濱建介副会長が討論者として参加した。

釜山市では、ホ・ナムシク(許南植)市長が去る2月26日に発表した釜山市の10大政策のなかで「日韓海底トンネル建設問題に対して真剣に検討する必要がある」と発言したことを皮切りに、日韓トンネルの賛否両論が沸騰している。このシンポジウムは、「日韓トンネルが釜山の経済に活力を与える画期的なチャンスとなるかどうか」について専門家が様々な観点から検討することを趣旨としている。主催は、釜山市の外郭団体である財団法人釜山発展研究院で、釜山市庁舎に隣接する会場には日韓トンネル推進に賛成あるいは反対する聴衆200人以上が詰めかけ、日韓トンネルへの熱い議論が展開された。

16時から開会式があり、釜山発展研究院のキム・ヨンサム院長が祝辞を、ホ・ナムシク釜山市長が歓迎の辞を述べた。

主題発表では、日本側の出席者として当会の野澤太三会長が「日韓トンネルに関して」という題で講演し、日韓トンネルのルート、断面構造、工法などを説明した。また今後の進め方として、日韓両国の関係者が協力しトンネルに関する技術的、経済的、社会



野澤太三 当会会長

的役割を明確にして公表する、など4項目にまとめた結果を発表した。

2番目に主題発表した釜山発展研究院の海洋港湾研究部ホ・ユンス副研究委員は「物流面からの日韓海底トンネルの活用可能性」という題

で講演し、韓国の物流予測6シナリオについて、各シナリオがもつ日韓トンネルの活用可能性を推測し、物流面から見た日韓トンネルの活用可能性は低いという否定的な結果を導出した。

3番目に主題発表した韓国中央大学物流システム工学科のホ・ジェワン教授は、「日韓海底トンネルと国土の均衡開発」という題で講演し、ユーロトンネルの事例および韓国内の産業連関分析結果を示し、日韓トンネルはトンネルが立地する釜山圏域の立地競争力を大きく強化させ、国土空間構造を分散化させる出発点になる、と肯定的な結果を示した。



ホ・ナムシク釜山市長



財団法人 釜山発展研究院
キム・ヨンサム院長



シンポジウム会場につめかけた聴衆



シンポジウムで日韓トンネルについて討論する主題発表者と討論者（釜山）

主題発表に続き釜山経済再生市民連帯のパク・イノ常任議長の司会で討論が始まった。



濱建介 当会副会長

最初に当会の濱建介副会長が、日韓トンネル研究会の活動経緯と比較ルート3案の基本的考え方について述べ、このうちの一本が日

本側の推奨ルートだとする韓国内の見方に対し修正を求めた。

2番目に韓国海洋大学 物流システム工学科のナム・ギチャン教授が、ユーロトンネルに比べ、日韓トンネルは事業規模が大きいわりに市場規模が小さいので事業性は低いと述べ、民間資本導入や一般的事業の扱いが不可能なため、市場や需要分析結果に基づく公共工事としての当為性や論理性の研究を行い、

日韓トンネルの妥当性を議論する必要があることを指摘した。

3番目に中国延邊科学大学対外部のイ・スンリョン総長は、主題発表者3名に対しそれぞれ複数の質問を投げかけた。

4番目にソウル大学地球環境システム工学部のチョン・チャンム教授は、現在の釜山の力では釜山とユーラシア大陸をつなぐ鉄道建設の可能性はなく、日韓トンネルの建設により日韓経済圏ができてこそ首都圏ソウルとの対抗が可能になる、と力説した。

このあと、聴衆を含む質疑応答が続き、最後に主催者である釜山発展研究院のキム・ヨンサム院長が「本日は結論を出す日ではなく、活発な議論を釜山で始めるスタートの日」と結び、シンポジウムを終了した。